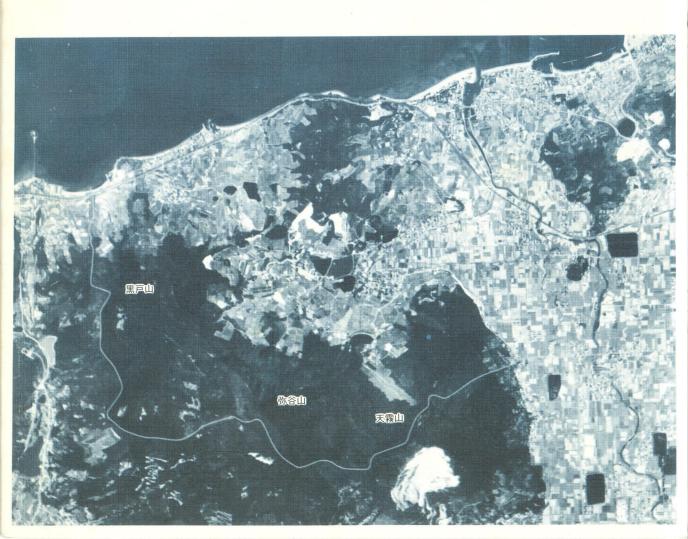


香川県善通寺市・多度津町・三野町にまたがる中世山城跡

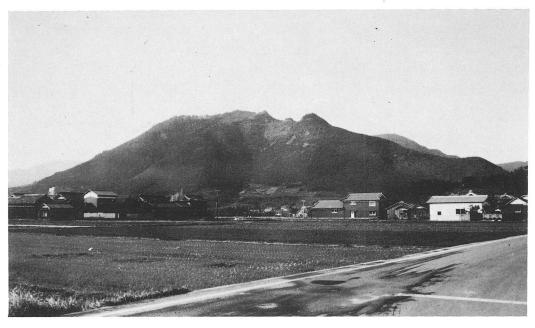




弥谷山山系 左から天霧山・弥谷山・黒戸山・白方山 (多度津町奥白方より)



- 1. 天霧城跡 香川氏の要城 (詰の城)。
- 2. 本台山城跡 香川氏の居館跡、多度津城ともいう。現桃陵公園の丘陵地一帯とされ、石垣・土塁の一部や古井戸が残る。また「本台」「城下」の古地名がある。
- 3. 貴峰山城跡 全讃史に「藤田四郎入道宗遍、之を築けり。…後世に綾景利と云う者あり」と記される。標高222m の山頂部三段の構えに続いて4ケ所の削平地がある。
- 4. 甲山城跡 香川氏の出城。全讃史に「朝日奈彌太郎之を築けり。蓋し朝日奈三郎義秀の裔なり、 剛勇膂力人を兼ねたり。香河 (川) 氏の麾下なり」とある。74番札所甲山寺裏手の標高80m 余の甲山 山頂部を中心に五~六段の削平地がある。
- 5. **磨臼山城跡** 香川氏の出城。西讃府志の御巡見使案内帳によると飛田伯耆守、また香川伊賀守がここに拠ったという。大麻山北麓にあたる丘陵地磨臼山には現在確かな城跡は見られない。
- 6. 中村城跡 全讃史に「仲行司貞房居之」(屋島の戦いで源氏に組す)とあり、また「後世有行司 清左衛門 猶居之」とも記されている。善通寺市中村町宮東に方形館跡を想定せしめる土塁・深跡の 一部が残る。
- 7. **金 倉 城 跡** 奈良氏の旗下金倉顕忠 (鬼中津の称あり) の居城跡。香川氏と所領にからんで対立。 天正 3 (1575)年香川・香西・福家・羽床氏らに攻められて落城。城跡は丸亀市金倉町円龍寺・西教寺境内、あるいは中津町中の村周辺とされる。



天霧城跡遠景 (多度津町青木より)

天霧山は、内海に臨む屏風のような弥谷山山系の北東部に一段高まる山塊である。その標高 382m~360m にかけての山頂部から、東・北東・北方に向けて短い尾根が下る。南西側は最高所より急に下がって二つの小さな高まりがあり、弥谷山との鞍部に至る。山の周囲は急崖急坂の斜面で、全山自然の要害地形をなしている。また眼下に丸亀平野を収め、南西方面に三豊平野を、北方には多度津・白方の海岸線から内海の広がりまで遠望することができる。実に、天霧山は天険の地形に加えて、陸海どの方面の動向にも十分に対応できるという地理的な好条件



弥谷山山系と天霧城跡

を備えている。城主香川氏の居 館本台山城とも速やかに連絡が 取れる立地であり、香川氏が有 事に備える城地(詰の城)を天 霧山に求めたことは、まことに 当を得ているといえよう。

城跡は山頂部及び派出した尾根上に所在し、その城構えは山頂部を中心に各尾根の郭群(遺構中の削平地を郭と呼ぶ)が巧みに結びつき、全体的にまとまりをもって各方面への防備ができるように配慮されている。

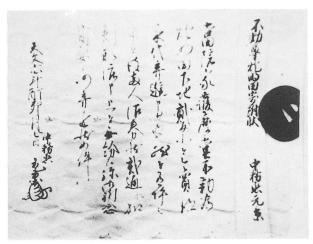
城主香川氏

香川氏は、相模国香川荘の出身で鎌倉権五郎景政の後裔であるという。14世紀半ば過ぎに讃岐の守護細川氏に従って入部し、多度津本台山に居館を構え、天霧山に詰の城を築いて西讃地方に勢力を広げていった。その嫡流の系譜について、諸文献を検討した『善通寺市史』では「頼景―和景―満景―元景―之景―親政」としている。

応永7年(1400)頃に西讃の守護代と しての地位を得ており、明応2年(1493) 頃には讃岐13郡のうち西讃6郡を領有 するようになった。時に、阿波三好氏 が長慶以来急速に勢力を伸ばし、讃岐 をも併領しようと動き出した。永禄元 年(1558)9月長慶の弟実休は阿波・東 潜の連合軍を率いて丸亀平野に進み、 善通寺を本陣として天霧城攻略にかか った。しかし、香川氏は寡兵ながら要 害無比の城を利して動ぜず、ついに三 好方の派遣した香西氏の仲介で和議を 結んだ。降って、天正6年(1578)土佐 長宗我部元親の讃岐侵攻が始まり、香 川氏属城の藤目城(観音寺市)・本篠城 (三豊郡財田町)などが相次いで落城。 翌7年、香川氏は降伏勧告を受けて、 元親の二男親政を養子に迎え世嗣とし た。以後、香川氏は長宗我部の庇護下 に数年を経るが、天正13年(1585)豊臣 秀吉の四国征伐により元親が降伏する と土佐へ退いた。牙城の天霧城も主を 失い、荒廃の途をたどることになった。



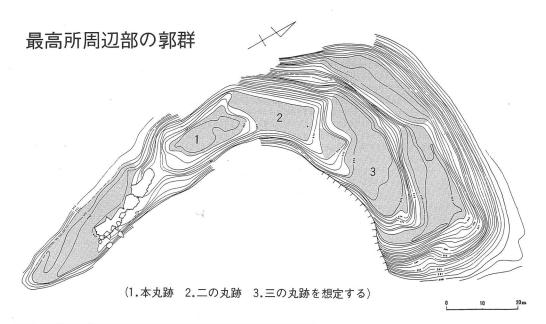
香川和景書状 文明 2 年 (1470)

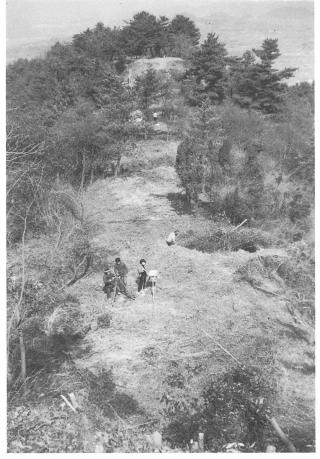


香川元景書状 天文6年(1537)



香川之景書状 永禄元年(1558)

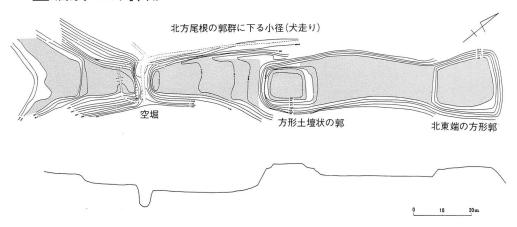




馬背状の尾根が続く山頂部

山頂部は最高所から北東に向けて 低下する馬背状尾根が続くが、その 狭長な地形を階段状に削平して郭を 連ねている。最高所の削平地は俗に 「モノミダイ」の称があり、他を十分 に統御し得る展望を有し本丸跡と思 われる。北東側に長方形の郭(二の 丸跡か) がくの字状に付き、さらに 一段小郭を配した下方にやや大きめ の郭 (三の丸跡か)を置き、それを 二段の腰郭が囲む。そして、高い切 岸を伴う郭と長方形の郭を続けて空 堀に下る。このように最高所周辺部 の郭群は相互に寄りかかって連接す る、いわゆる梯郭式の縄張りをとる。 さて、最高所南側には巨大な露岩と 不整形な郭があって、下方は「犬返 しの険地」と呼ばれる急坂となる。 それより弥谷山との鞍部に至る稜線 部にも6郭があり、背面の備えは十 分である。

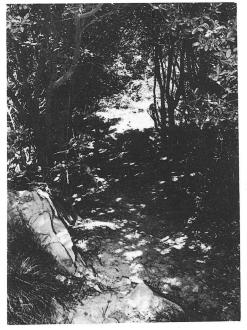
空堀及び外郭部(下記は地形断面図)



空堀は尾根最狭所を幅5m・深さ3 m 余にわたって切断する「切通し空堀」 ともいうべきもので、山頂部の郭群を 二分する形をとる。その堀底から北方 尾根の郭群や南西側の犬返し直下に通 じる小径が走る。これより細かい郭・ 土壇状の小郭・細長い郭が並んで山頂 部北東端の方形郭(標高360m)に達す る。この直線的な4郭の並びに変化を つけているのが方形土壇状の郭である。 前面の郭と2m、背後の郭とは5mに 及ぶ段差を設けて前後の変化をより大 きく見せている。そして、北東端方形 郭を起点に東・北方の尾根上に階段状 の郭群が延びる。

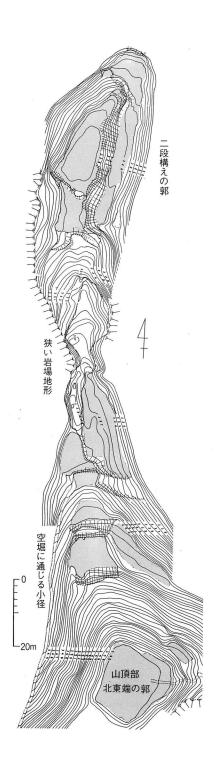
このような山頂部の郭群の在り方からみて、空堀より北東端方面が外郭(前衛部)、最高所に向って内郭(主要部)を構成していたものと思われる。北東端の郭は尾根分岐点にあたり、まさに外郭部の要となった所であろう。各尾根の郭群は外郭部の広がりを示し、「外郭線の守り」を固めるものである。





左・空堀から北方尾根の郭群に下る小径上・山頂部の内郭と外郭を分ける空堀

北方尾根の郭群





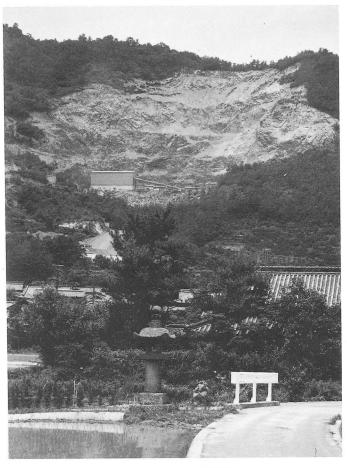
山頂部北東端より北方尾根を望む



北方尾根二段構えの郭

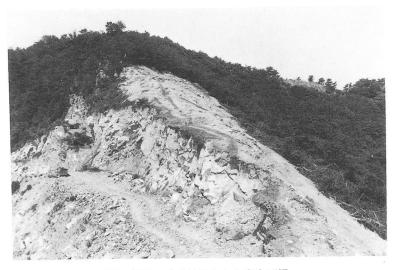
北方尾根の標高320m あたりまでに10郭、下って295m~280mに3郭、280m~275mの尾根先端部に4郭が並ぶ。そのうち、狭い岩場地形を少し下った北東方尾根の分岐地点には、尾根筋の郭と東側直下を掘削した細長い腰郭とによる見事な二段構えが見られる。また、尾根筋の小さな鞍部を経た先端部は、頂部に隅丸方形状の郭が造られ、それを防護するように南・北側に小郭が付属している。

北東方向に低下する尾根筋にも、大小15郭が階段状に連続する。上方に4郭、次いで標高200mあたりまでに8郭、尾根取り付き部に3郭がある。北東麓の吉原町東碑殿から尾根南側の谷沢を登る小径があり、北方尾根二段構えの郭に連絡する。なお、それより谷沢の斜面を上り気味に南へ横切ると東方尾根の第8郭に達する。



山頂部に迫る栗石採掘

城跡は、南麓の善通寺市吉原 町で昭和43年頃から始まった栗 石採掘作業が年々拡張され、大 きく山腹がえぐり取られるにつ れて重大な影響を受けるように なった。このため、県教育委員 会及び一市二町天霧城跡保存会 は保存運動を進める一方で、昭 和49年と52年に城跡重要部分の 測量調査を行い、遺構の全体的 な把握に努めた。これによって 城跡の大規模な構造形式(縄張 り) が判明するに従い、一層そ の評価が高まったにもかかわら ず、栗石採掘は山頂部にも迫る 勢いをみせ、ついに東方尾根の 3~4郭が半壊以上の状態に陥 った。さすがの天霧城も「採石」 というかつてない強敵に脅かさ れ、落城の危機に直面している。



栗石採掘でえぐり取られた東方尾根

東方尾根郭群の発掘調査

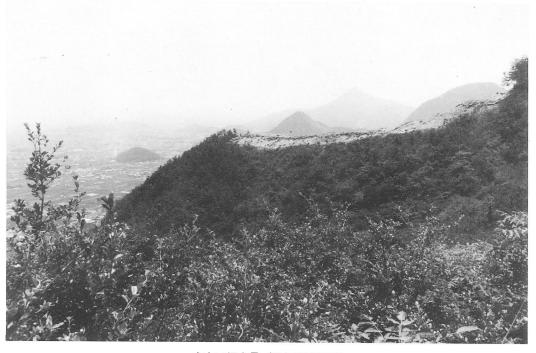
天霧城跡は、昭和52年12月に国の文化財保護審議会より「中世山城の縄張り跡をよく止めている」と高く評価され、史跡指定の答申を受けた。しかし、その後も栗石採掘作業に伴う東方尾根の郭群の崩壊が進み、かつての要害堅固な城砦の景観が大きく損われていった。ここに、県教育委員会・保存会・採掘業者の三者協議が重ねられ、昭和56年4月から8月にかけて東方尾根の郭群についての全面的な発掘調査が実施された。

東方尾根には、標高305mの先端部までに大小11ケ所の郭が並んでいた。その間約250m、比高差55mほどで、尾根筋の半ばで傾斜が変換する。なお、南麓の東西神社から山頂部に至る小径

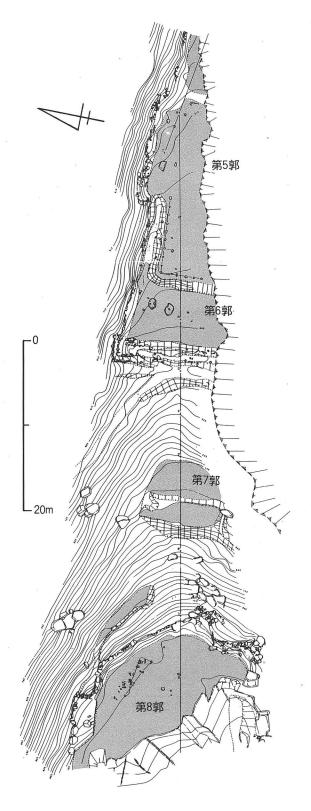
がこの尾根筋に通じている。調査は、 北東端方形郭の下方斜面にある三段の 小郭を除く8郭について行われた。便 宜上、先端部の郭より上手に向って順 次第1・2…8郭と呼び、各郭の概況 をたどることにする。いずれも規模・ 形態・付属施設等において特徴点をも ち、単に尾根筋に削平地を連ねたとい うものではない。



東方尾根先端部の発掘

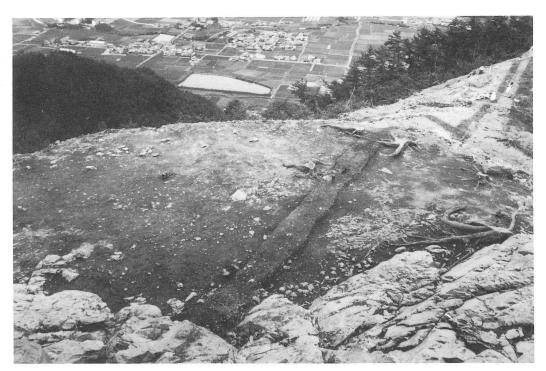


東方尾根全景 (発掘調査区域)



東方尾根上手の郭群

第8郭は尾根筋及び北側斜面を大き く掘削して平坦部を確保したもので、 明らかに丸亀平野の中央部を志向する 在り方である。郭の周囲には多角形状 に石垣を巡らし、前面を堅固にしてい る。北側に少し下がって方形の小区画 が付属し、そこから第7郭との斜面中 ほどにある細長い小平坦部まで通路が 下る。第7郭の周辺はやや緩い斜面と なるためか、土止め用の石垣を設けて いない。郭の西半部は破砕礫を敷設し て一段高い。下方で尾根筋の傾斜が変 換するが、そのあたりから栗石採掘に 伴う郭配置部の損壊が著しくなる。傾 斜変換地点には浅い堀切りとその前面 に石塁が造られている。堀切りから北 西方向に通路が延びる。石塁の北端部 は二段の石垣で角取りし、石塁に接し た第6郭の北側縁も石垣固めである。 長方形の第6郭北東隅から第5郭に向 けて低い石塁が延びている。その断面 は台形を呈し、地山整形の上部に破砕 礫を積み上げたもので、残りがよい。 また、石塁上に柵列でも存在していた のか、根石様の配石が認められた。第 5郭では、石塁と背面切岸に沿ってL 字状に配列した礎石が検出された。東 西10石、南北6石が見られ、礎石間隔 は1mほどである。ただ、郭の南部が 既に削除されており、南北方向の礎石 数や南側の礎石列がどうなっていたの かは不明。東側の礎石列も移動その他 で消失しているのかもしれない。



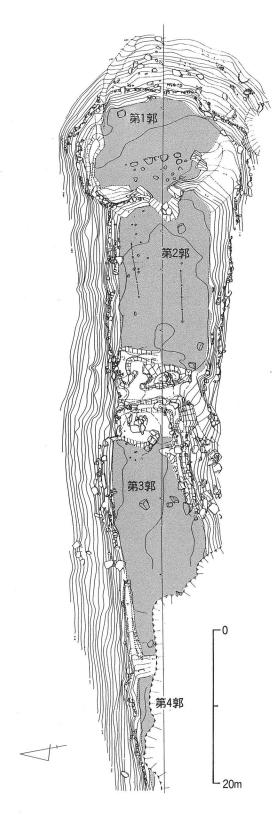
第8郭の平坦部



第8郭北側の石垣



第6郭背後の石塁と浅い堀切り



東方尾根先端部の郭群

第4郭は、かろうじて北側部分を残す 状態である。第3郭との北側連接部に第 5 郭で見られたと同様な低い石塁が延び る。第3郭も南西部をえぐり取られてい た。ほとんど高低差のない第2郭とは堀 切りで区分される。堀切りの両側には相 対応するように桝形状の石塁が設けられ ている。ここでも塁上に柵様のものが付 設されていたのであろう。そうすると迷 路のように石塁・堀切り・石塁と経て、 両郭が通じることになる。堀切りには南 麓からの「うま道」が通じていたと伝え られるが、採石のため取り付き部分しか 残っていない。第2郭の南・北寄りに東 西方向の各5石からなる礎石列が存在し た。先端の第1郭は半円形を呈し、地山 掘削で前面に急斜面を造り出している。 周囲の斜面部に礫土を留める石垣が多角 形状に積まれ、頑丈な構えを見せる。第 2郭との切岸中央に大きな露岩が2つあ り、その間に棚状の石が置かれ、前面に は礎石様の4石が並ぶ。周辺から近・現 代の瓦片・漆喰、寛永通宝などが出土し、 後世の何等かの施設があったことを物語 る。南部に第2郭へ上がる緩斜面が造ら れ、北部に第2郭から石塁が下がる。さ て、各郭の造成では基底部に石積みを施 して礫土を留め、石塁部分で岩盤を利用 するなど、事前の縄張りが綿密に行われ ていたことを窺わせる。第2・5郭の礎 石列も建物遺構として注目される。



東方尾根の先端部



第2郭南斜面の石積み

出土遺物

東方尾根第2・3郭の 北側斜面を中心に土師質 土器(皿・坏・埦・鍋・ 擂鉢など)や輸入陶磁器 (青磁・白磁・染付)が相当 数出土した。土器類では 皿・坏が多く、それらの 成形時の底部切り離しに 回転ヘラ切りと静止糸切 りの2種が見られる。鏃・ 刀子・切羽・鉄鍋・釘な ども出土している。鏃は すべて先端がふたまたに 開く雁股鏃。釘は第1~ 8郭にわたって多量に出 土し、礎石列とともに建 築物が存在した可能性を 大きくさせる。なお、開 元通宝から寛永通宝まで、 32種・142枚の銅銭が出 土した。その大半は北宋 銭が占める。これらの出 土遺物が示す年代は、お よそ15~16世紀であろう。 東方尾根の郭群が、その 時期には築造され、機能 していたことが考えられ る。







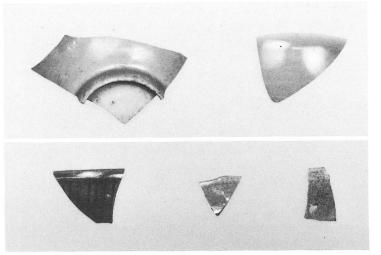
土師質土器の皿



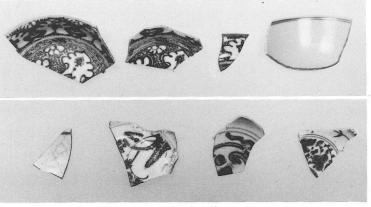




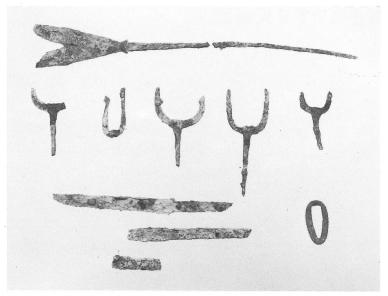
土師質土器の埦



青磁など



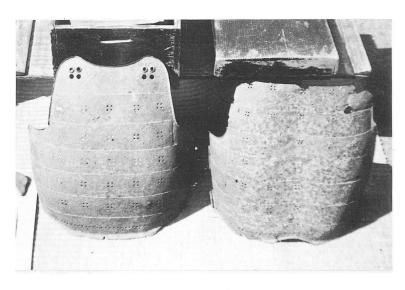
染付 (内面)



雁股鏃・刀子・切羽



紐通しのままで埋もれたと思われる銅銭



城跡出土と伝えられる 甲冑残片

(多度津町奥白方 山地忠敬氏蔵) 菱綴の二枚胴残片で 写真左の前胴と右の 後胴とは別組みであ るという。

讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡

天霧城跡では、最高所から次第に低下する階段状の郭群が北東方面に延びて、この方面に対する城構えが十分にとられている。これに対して弥谷山との鞍部に向う南西方面の郭群は犬返しの険地を隔てて存在し、主要部の背後を守備する立地となっている。この点、最高所から北東方面を大手、南西方面を搦手として考えることができる。城構えの主要部、即ち内郭は梯郭式の縄張りをとり、内・外郭は空堀によって区分される。空堀は地形的にも縄張り上からも絶好の地点に位置して、内郭防備の効率を一段と高めている。北東端の郭を要とする大手方面外郭部の守りの広さ・堅固さにも注目される。それらは主要部を幾重にも防備し得る態勢をとっており、それが天霧山に備わる立地条件や天険の地形と相まって優れて要害堅固な天霧山城を成立させているのである。こうしたことは東方尾根の発掘調査によって一層明らかになった。現われた郭群の雄大さもさることながら、要所に堀切り・石塁等を施す細かい配慮も行き届いている。

城跡の縄張りや造作状況は、従来言われてきたように戦国時代末頃(16世紀後半)に該当するものであるが、多くの中世山城と同様に一時期の築城ではなく、必要に応じて拡張、増強されてきたものであろう。東方尾根の郭群に限って言うなら、15~16世紀の築造年代が考えられるわけである。さて、この貴重な城跡保存のために県及び関係市町・保存会などが精力的な取り組みをしてきたわけであるが、一部は無残にも崩壊が進んでいる。現在、国指定史跡としての答申を得て、いち早く正式指定となる「官報告示」が待たれる段階にある。



東方尾根から丸亀平野を望む



天霧城跡に学ぶ多度津町文化財少年団

本書に掲載した図版・写真等について、香 川県教育委員会及び多度津町・加々見平八郎 氏から格別のご協力をいただいた。記して深 く感謝の意を表します。

天 霧 城 跡

昭和58年12月1日発行

執筆・編集 秋山 忠

発 行 一市二町天霧城跡保存会

香川県仲多度郡多度津町栄町1-1-91

多度津町教育委員会内

印 刷 株式会社 美 巧 社

高松市多賀町1-12-2



空堀内壁の石積み